

年月日

26

01

19

ページ

04

NO.

産業技術総合研究所理事長

石村 和彦

いしむら・かずひこ 79年（昭54）東大院工修士修了、同年旭硝子（現AGC）入社。00年旭硝子ファイントekノ社長。06年旭硝子執行役員、08年社長、15年会長。20年産業技術総合研究所理事長。経済同友会副代表幹事などを歴任。兵庫県出身、71歳。

大学と連携、日本に『革新の生態系』

# 社会実装へ研究の場提供

講壇

一方で、日本全体では博士人材の不足と市場で求められる人材像とのミスマッチといった課題もある。大学には高い専門性を有する人が数多く存在するが、産業界の需要が完全には合致していない。基礎研究や応用研究、社会実装という各段階、さらに材料、量子、AI、エネ

金体のインベーション・エコシステムを形成していく上で重要なパートナーだ。産学官が一体となるには、産総研と大学が互いの強みを發揮することが不可欠である。



「大学が産総研を活用することで双方の成長につながる」と指摘する益センター長㊨

これらは、大学とは異なる産総研の役割を明確化した上で大学や企業と連携し、素早く研究成果を社会実装するための仕組

は企業にとっても魅力が大きい。産総研で対応しきれない部分を大学が担うことで、企業が抱える幅広いニーズに応えられるようになるからである。この時に活躍するのが、AIST（AIST Solutions）で、23年に産総研が社会実装を加速するために設立した100%子会社だ。

AISTが企業やマーケットのニーズを捉えて、それに合致する産総研の技術だけでなく、大学の知見も合わせてマッチングできるようになると、産学官の連携をより迅速にインベーションを生み出す形に変えていける。そのため、AISTでは、産総研の技術と企業の事業課題をつなぐ生成AI「Big Bi b i d i」を提供する。今後、産総研と連携する大学の技術を取り込む予定だ。

産総研は今、「非連続な成長」を目指している。これは大学や企業、産総研が強みを持ち寄り、多様な人材が多様な形で連携することで、従来の枠組みでは達成できなかつたインパクトを社会にもたらすことだ。そのため、大学との連携の方を問い合わせ、最適な形で再設計し続けなくてはならない。大学と相互に知見や資源を生かし、ともに新たな価値を創り出す関係を発展させていきたい。（次回は静岡文化芸術大学文化政策学部教授の眞根秀一氏です）

国研である産業技術総合研究所（産総研）と大学の連携は、日本のイノベーション・エコシステムの基盤である。連携のあり方を見直し続け、新たな価値を創り出していく。

みづくりである。